

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20720233

研究課題名（和文） アイヌ民族の「儀礼用冠」に関する実証的研究とその現代的意義

研究課題名（英文） Study on Ainu Ceremonial Crown and modern meaning

研究代表者

山崎幸治（YAMASAKI KOJI）

北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・助教

研究者番号：10451395

研究成果の概要（和文）：儀礼用冠の調査をおこなうなかで、現代のアイヌ物質文化研究では、マクロな視野からの研究（地域性など）と、ミクロな視野からの研究（民具の製作技術）の両方が必要不可欠であることを明らかとした。また、その成果を現代のアイヌの人々と共有するためのシステム構築が必要であり、その際には「複製」がキーワードとなることが確認された。

研究成果の概要（英文）：While conducting research about Ainu ceremonial crown, I found both macro (such as regional character) and micro (such as technique of craft making) researches were necessary to clarify modern Ainu material culture. Also, in order to share research result with Ainu people, a certain kind of system needs to be established. When establishing the new system, the notion of “reproduction” seems to be important.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：物質文化

1. 研究開始当初の背景

2007年9月13日、国連総会において「先住民の権利に関する国連宣言」が採択された。

また、2008年6月6日には、衆参両議院本会議において、「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が決議された。これらの

社会動向を機に、アイヌ民族の文化活動の現場にも新たな変化がみられるようになった。それは、これまで「先祖から受け継ぐ伝統文化」という、やや曖昧さを保持したまま実施されてきた文化活動（儀礼・工芸など）を、アイヌ民族自らが先住民族であることの拠り所として強く意識するようになり、今まで以上に学術的な正確性を求めるようになってきたのである。

現在に生きるアイヌ民族の日常生活は、他の日本国民と変わらない。そのため自らの伝統文化や歴史を知るためには、これまでの文化人類学者や歴史学者が残した研究成果に頼る現状がある。筆者は、日々の職務においてアイヌ民族の人々と関わっているが、研究者と同等、もしくは、それ以上に、一般のアイヌ民族の人々から学術的な問い合わせを受けるようになった。しかも、その問い合わせは、民具の製作技術など極めて具体的である。本研究では、その一例として「儀礼用冠」をとりあげた。その理由は、それが現在のアイヌ民族の儀礼において、最も頻繁に使用される民具であるにも関わらず、その研究蓄積が少ないために、その形態等において画一化が進行しているように思われたからである。

2. 研究の目的

本研究では、北海道アイヌの男性が儀礼の際に被るサパウンペ、サパンペ、パウンペなどと呼ばれる「儀礼用冠」を一つの事例として、物質文化研究の視点から、その多様性について研究をおこなうとともに、研究をとおして、現在のアイヌ民族の人々と意見交換をおこない、アイヌ自身が、アイヌ文化の多様性を再発見し、今後それぞれの地域に根ざした文化活動が活性化されることを目的とする。このことは、すなわち博物館資料の現代的意義となる。

3. 研究の方法

本研究では、大きく2つの物質文化研究のアプローチにより実施した。

ひとつは、現在出版されている博物館の目録等の図録・目録等を利用したアプローチである。ここでは「儀礼用冠」のデータおよび写真を集成し、研究用データベースを作成した。それらのデータを基に、形態的な多様性を把握した。

もう一つのアプローチは、「儀礼用冠」を所蔵する博物館において資料を実見する方法で実施した。その際、特に現在失われてしまった製作技術に注目した。

研究期間には、できるだけアイヌ民族と議論をおこない調査で得られた情報を、現在の文化活動等へ効果的に還元するための方策を検討した。また、北海道内外のアイヌ文化関連研究機関の研究者にも協力を仰いだ。

4. 研究成果

(1) 文献調査は、現在出版されている北海道内の博物館、資料館の目録（72冊：掲載資料数22,312点）から、「儀礼用冠」に関する情報を集成した。その結果、約50点（記載から明らかに樺太アイヌの資料は除く）が道内に存在している現状が明らかとなり、そのうち20点が北海道大学植物園北方生物圏フィールド科学センター植物園に所蔵されていることが判明した。

分析の結果、北海道大学植物園北方生物圏フィールド科学センター植物園所蔵資料において最も多くのバリエーションが認められた。これは、イクパスイやイナウなど同館所蔵の他の資料が持つ特徴からも資料収集者の意図によると推測される。

また、図録以外の文献では、金田一京介・杉山寿栄男『アイヌ芸術（服装篇）』（1941）が最も多くのバリエーションを提示していた。そこでは、狼、魚、鷲等が付された儀礼

用冠が紹介されている。ここでは、儀礼用冠本体が、木偶を頭とする胴体と解釈される点、コイル状に巻かれた縄が付される儀礼用冠を比較的古式のものであるとする点、北見美幌地方では、ある種の儀礼用冠は頭に頂かず神前のみに供えられものであったという点など興味深い指摘がなされている。

現存する博物館資料にもとづけば、平取や二風谷など沙流川流域で収集されたものにはその先端にクマがつくものが多かった。一方、現在あまり見られない形態の儀礼用冠は、胆振地方や噴火湾周辺で収集されたものが目立った。

なお、本研究では、和人によって描かれたアイヌ絵は調査対象としなかったが、『蝦夷嶋奇観』(1800年)などの数点を除き「儀礼用冠」を描いたものが極端に少ないことが判明した。また、近代以降における北海道観光におけるアイヌ文化表象が、現代の「儀礼用冠」に与えた影響も無視できないことが本調査の過程で明らかとなった。

先端に付される木偶の意味については、収集できた情報が少なかったため、本研究において結論は出せなかった。調査時点において、まだ目録等を出版していない機関も多い。今後さらなる情報を蓄積が望まれる。

(2) 実見調査では、(1)の文献調査に基づき「儀礼用冠」の実見調査をおこなった。その際には、資料の収集地・収集年等の背景情報が付されたものを優先的に調査した。

日本国内では、その資料数およびその多様性から北海道大学植物園北方生物圏フィールド科学センター植物園を中心に調査を実施した。20点の資料のうち、収集地が判明しているものは11点、そのうち収集年が判明しているものは6点であった。

それらの資料のうち、木偶が付されたもの

は11点あり、クマ9点、鳥1点、不明1点であった。クマの木偶には観光土産によく見られる木彫熊に似るもの、上下に2つの熊が付されるものがあった。クマの木偶が付された1点には、本体内部にクマと思われる毛皮が縫い付けられているものもあった。また、目に金属製の釘を用いたものもあった。

それ以外の形態では、イナウ頭部とその直下につく削りかけのみを残して切断し、イナウ頭部直下に残った削りかけを冠状にしたものを、さらにブドウズルを扁平に編んだ本体に付したものなどがあつた。

北海道大学植物園北方生物圏フィールド科学センター植物園調査における最大の成果は、コイル状の縄を編んで作られる儀礼用冠に関する成果である。調査は、アイヌ工芸家の方々との共同調査でおこなった。それにより植物園資料のコイル状の縄で編まれた儀礼用冠に、莫菴などの材料となるガマの「みみ」と呼ばれる部分によって製作されているものがあることが判明した。調査後、その判明した素材と技術について工芸家の方々とともに部分的な複製をおこない、その製作方法の一部を解明した。

また、アメリカ合衆国アメリカ自然史博物館において調査をおこなった。当博物館には、1900年にバシュフォード・ディーンによって収集された儀礼用冠が4点所蔵され、いずれも収集地が明記されている点で重要と判断されたからである。Usu(有珠)で収集された「儀礼用冠」の本体部分は、切断した樹皮製であった。先端部にはイナウの頭部があり、その上にキツネと推測される尾の大きな動物の木偶が付されていた。本体部分の側面にはコイル状の縄が波状に巡らされ、その中に銅に似る丸い金属版が付されてきていた。背景情報が付され、かつ、極めて類例の少ない資料であり、有珠におけるアイヌ文化を示す

貴重な資料といえる。

(3) 博物館資料の現代的意義について

本研究では、アイヌ民族の工芸家との共同調査および意見交換も実施した。また、研究成果等を広く市民へ還元する場でもあるアイヌ文化展示に関する予備的な調査、およびアイヌ資料を所蔵する博物館関係者とも、資料の現代的意義について議論をおこなった。これらの調査と意見交換の一部は、筆者が企画したアイヌ文化に関する展示の準備作業と同時に行われた。

議論を通じて、アイヌの伝統文化に関わる人々のなかに、博物館資料を活用し、それぞれの出身地（地元）に根ざした文化復興および継承活動を希望していることが確認された。また、それと同時に博物館側の対応（所蔵情報の欠如、調査に対する制限など）も意見として述べられた。

博物館関係者との議論からは、経年劣化が進むアイヌ民具資料の修復技術（者）が求められている現状が確認された。

このことは、アイヌ民族側、博物館側のいずれの立場から、博物館資料に対して現代的意義を見出し、その方向性を模索しているといえる。それと同時に、博物館資料に互恵的な現代的意義をもたらすためのシステム構築が十分に確立されていない状況も判明した。

両者の互恵的関係を構築するためのシステムには様々な可能性があるだろうが、本研究の成果として「(民具の)修復・複製」を挙げることができる。

本研究を通じて、「複製」作業は失われた技術を復活させるとともに、複製作

業をおこなった人物を通じて今後の新たな文化伝承が展開されることが明らかになった。複製された資料を教材とすることで、伝統的な製作技術を学ぶ機会の増加が可能となる。

また、まだ構想段階であるが、博物館側にとっても劣化したアイヌ資料の修復・複製を依頼できる技術者が増えることは大きなメリットとなろう。また、痛みの激しい資料を単に非公開とするのではなく、その複製資料を提供することで資料公開と資料保存の両立が可能となると思われる。

本研究で得られた情報と成果は、今後の研究において展開可能であるため継続して考察していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① YAMASAKI Koji Sustainability and Indigenous people: A case study of the Ainu people. In Mitsuru OSAKI (ed.) *Sustainability Science IV - Designing Our Future from Local and Regional Perspectives -Bioproduction, Ecosystem & Humanity-*. Tokyo: United Nations University Press, 査読有, IR3S book series vol. 4, (現在印刷中)
- ② 山崎幸治「アイヌの靈魂観」『古代世界の靈魂観』(勉誠社), 査読無, アジア遊学 128, pp. 124-135. 2009.
- ③ 佐藤知己・山崎幸治「北海道アイヌ・先住民研究センター案内看板のアイヌ語表記について」『Itahcara』, 査読無, Vol. 6, pp. 69-74. 2009.
- ④ 山崎幸治「現代における物質文化資料の収集について(コメント)」北海道立北方民族博物館(編)『北太平洋の文化—北方地域の博物館と民族文化—③』, 査読無, pp. 41-44. 2009.

[学会発表] (計2件)

- ① 山崎幸治「リーシャ・デイビス氏・村本美幸氏へのコメント」, 財団法人北方文化振興会主催『第24回北方民族文化シンポ

ジウム：現代社会と先住民文化①－観光、芸術から考える－』，網走市，オホーツク・文化交流センター．2009年10月18日．

- ② 山崎幸治「現代における物質文化資料の収集について（コメント）」，財団法人北方文化振興会主催『第23回北方民族文化シンポジウム：北太平洋の文化－北方地域の博物館と民族文化－③』，網走市，オホーツク・文化交流センター．2008年10月18日．

〔図書〕（計1件）

山崎幸治・加藤克・天野哲也（編）

『teetasinrit tekurukoci 先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料－受けつぐ技－』札幌：北海道大学総合博物館・北海道大学アイヌ・先住民研究センター，総ページ数102．

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎幸治 (YAMASAKI KOJI)

北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・助教

研究者番号：10451395